

Small Story in Kamijima

かみじま発 スモールストーリー



岩城総合運動場で行われる7人での日々の練習。



困難から 道はひらける

岩城中学校 (いわぎちゅうがっこう)

中学校生徒数 51名 野球部部員数 7名

「こんにちはー!」。海岸線を歩いていると、自転車に乗った子どもたちが、追い越しざまに振り返って元気に声をかけてくれる。岩城島には、そんな子どもたちがたくさんいる。彼らは、保育所から学年1クラスという環境で育つ。

そんな島の中学校の野球部は、現在部員数7名。単独では試合に出ることはできない。岩城島だけではなく、離島の野球部は、部員不足により、単独で試合にでることが難しく、野球部存続の危機に立たされている学校も多い。

「島」で、野球をすることにどのような意味があるのだろうか。野球は必要なのだろうか。人数が少なくなるなかで、どう続けることができるのか。岩城中学校の野球部で、子どもたちが野球を続けられるよう奮闘されている顧問の先生にお話を伺った。

※2012年1月現在



お話をきかせてくれた人

岩城中学校 教師（保健・体育）

田窪 大介さん（30歳）

1981年今治生まれ。大学を卒業後、小学校の体育講師などの経験を経て、教員採用試験に合格。母校で初任者研修を行い、教師生活2年目から岩城中学校に赴任。来年度で教師生活4年目。3年生の担任を任されている。趣味は、釣り・ゴルフ。家族は、父、母、弟。これから始めたいことは、シーカヤック。死ぬ前に食べたいものは、卵かけごはん（納豆付きで！）。

部活を教えたくて、 中学校の教師になった

—教師になろうという思いは、いつ頃からお持ちだったんですか？

小学生くらいのときから、教員への憧れみたいなものはありました。小学校3～6年のときの先生のことは、よく覚えています。今でも、たまにお会いしています。いろんなタイプの先生がいました。よく怒られた先生もいましたけど。

現実的に先生になりたいと思ったのは、中学生で進路を決めるときくらいからで

です。先生になるには大学に行かなくちゃいけないから、自分が行きたい大学に進学できるような高校を受験しようと思いました。

—なぜ中学校の先生になろうと思われたんですか？

部活を教えたくったんです。自分もやってたから。中学校は剣道部で、高校・大学は、陸上部で短距離をしてました。スポーツしか得意なことがなかったので、教員をやるとなったら自然と部活動に行き着いたというか。あんまり、理由は無いですね(笑)。

挨拶がしっかりできるという 基本的で大事なこと

—島で教師をするということで意識していることはありますか？

うーん、やっていることは特に市内の中学校と変わりはないと思うんですけど、子どもたちは間違いなく、素直で純粋です。岩城に関して言えば、地域がしっかりしているの、基本的な生活習慣がしっかりできている子どもが多いですね。教えるスタートがちよっと高いところにあるので、教員から子どもたちにちよっと高いことを望むこともありますね。

うちの学校は、特に挨拶がしっかりできていると思います。これも地域や家庭が、かなり指導してくれているからだと思うのですが、初めて来た時はびっくりしました。先生に対して、「おはようございます」とか「さようなら」とかは、「やらなければいけないからやる」という儀礼的な理由でしたとしても、ここの子どもたちは、子どもたち同士、地域の人に対してもしっかり挨拶するんです。こちらが何も言わなくてもできている。これは、なかなかないことかなあとと思います。

—子どもたち同士でも挨拶するんですか？

学校に来て、正門ぐぐったら、子どもたち同士で「おはようございます」と挨拶しています。初めは、こっちがえっ？て思いました(笑)。



部員7人の野球部

—現在の野球部の活動について教えてください。

現在(2012年3月)の部員数は、1年生3名、2年生4名の計7名です。1年生には、女子も1名います。

以前は、弓削中と一緒にやっていたのですが、弓削中の野球部が3年生の卒業を機に休部になってしまったので、今は、宮窪中(大島)の野球部と一緒にやっています。宮窪中は、部員数6名です。



この日は、高校入試で学校がお休みだった卒業生も練習に参加。寒空の下、グラウンドには大きな声が響く。

平日は、うちの中学校だけで長江(岩城)の球場で練習をして、土曜は、交代で、宮窪に行ったり、岩城に来てもらったりしています。日曜は、だいたい練習試合ですね。試合は、今治や西条に行っています。

島を超えて、町を超えて、つながっていく

—弓削中と組んでいた時から変わったことはありますか？

町外というのは大きいですね。弓削中

—どういう経緯で、宮窪中と一緒にやるようになったのですか？

どこの島しょ部も野球部は人数がいらないんです。ここも、あそこも足りないという状況だったので、宮窪中の先生が音頭を取って下さって、島しょ部の野球部の顧問が集まって、今後の島しょ部の野球について考える会が開かれました。

宮窪中の野球部は6名でしたが、同じ大島内の吉海地区は単独で野球ができる状況でした。本来であれば、宮窪中は同じ島内の吉海中とチームを組む

と組んでいた時は、弓削が3名だったので、こちらに合流してもらって練習していました。宮窪中の場合、練習に行くにしても、費用も時間もかかります。学校行事も異なりますから、行事の合間を縫って、練習計画を立てるのも大変で、弓削中のときよりも合同練習が難しくなったのは事実です。

—チーム構成が変わって、子どもたちには何か変化がありましたか？

宮窪中の先生が監督、僕がコーチという形をとっているのですが、僕らが—

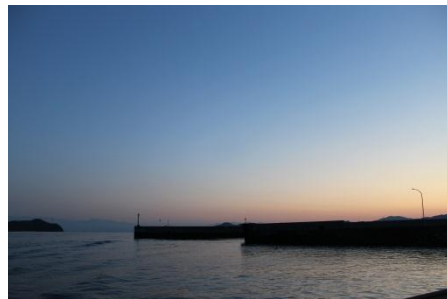
ことになるのですが、岩城がこういう状態になっているので、足りないところ同士で、1年限りのチームを作ろうということになったんです。ですので、宮窪・岩城の合同チームは、この4月で解散となります。4月の総体は、新入生を入れて、単独チームで出る予定です。

—新入生の入部はありそうですか？

岩城中の来年度の新入生は、全員で7名。そのうち、男子が3名です。最低2名が入部してくれないと、困りますね。大丈夫だろうと信じていますが…

番心配していたのは、初めて会った子どもたちが、チームとしてまとまるのかなということだったんです。でも、その心配はすぐなくなりました。会ったその日に、交流を深めて、和んでいたの、これは大丈夫だなと思いました。

岩城と宮窪というのは、あまり接点のない地域ですが、今回一緒になることで、お互いいい刺激をもらいながら、練習できています。チームとしても、まとまりがあると思います。



離島甲子園、初優勝！

—昨年夏は、離島甲子園での初優勝、おめでとうございます。先生にとって、離島甲子園はどんなものでしたか？

非常にいい経験になったというのは、間違いないですね。3年前は、隠岐の島、一昨年は種子島と、なかなか行かないようなところに行かせてもらいました。

また、今治地区の野球のレベルの高さがよく分かりました。これは、外と試合をすることで、はじめてわかることでした。今回、準決勝でやらせてもらった壱岐（優勝経験校）は、能力的には大人と子どもくらい差があって、正直、勝てると思わなかったんです。でも、うちが今治で揉まれてきたからこそ、あれだけ我慢できたし、それが勝利につながったのかなと思いますね。

学校の部活動としては、あくまでも一番の目標は、総体です。全国に続くものですから。離島甲子園は、こういう地域で頑張ってきたプレゼントとして、楽しむ大会と位置づけています。もちろん、勝てた方がいいけど、勝負をするのは総体だと生徒たちには言ってきました。

結果、総体は、結局1回戦で負けてしまって、楽しむための離島甲子園では、大いに楽しんで、優勝したと…

これは、僕にとっても勉強になりました。やっぱり、この子たちはのびのびさせた方がいいのかなと。島のいい所と悪い所だと思ってしまうのですが、勝負に弱いというところはあります。競争相手がそんなにいないので、勝負への執着心は弱い所があります。勝負事にはあんまり向いてないですね。逆にいえば、その分素直ということだと思います。一長一短です。

岩城中・弓削中合同チーム KAMIJIMA離島甲子園、優勝！

離島甲子園は、元プロ野球ロッテオリオンズのエース村田兆治氏の提唱により生まれた、離島在住の中学生による唯一の全国野球大会。地理的環境から本物のプロ野球選手と出会う機会の少ない離島の子供たちに、夢と勇気と希望の大切さを伝え、離島の人づくり、地域づくりに活かしたいという思いから2008年に始まり、今年で第5回目を迎える大会だ。

昨年8月18～21日にかけて、第4回大会が昨年上島町で行われ、全国から過去最多の19チーム、319選手が参加し、高校生の夏の甲子園に負けない熱戦を展開した。

上島町からは、岩城中・弓削中の合同チーム『KAMIJIMA』が参加。上島町は、第1回大会から参加しているが、昨年は1回戦で敗退。準決勝で、優勝経験校である長崎『壱岐市選抜』に見事勝利し、沖縄『久米島イーグルス』との決勝戦に進んだ。決勝は、雨のため3回途中で中止となり、実行委員会協議により両チーム優勝となった。第5回大会は東京・八丈町で開催される。



野球を通じて、 他を知り、己を知る

一島で野球をするということは、人数的に大変なことも多いと思うのですが、「島で野球をすること」にはどんな意味があるのでしょうか？

離島甲子園にしても、宮窪との合同チームにしてもそうですが、すごく色々な経験をさせてもらっていると思いますね。「普通の」市内の「単独で野球ができるチーム」にはない経験や体験をさせてもらっています。

僕自身が、部活動で育ってきた人間なので、そういう気持ちが強いというのがありますが、中学生の時期に、部活動で学ぶことは多いと思うのです。勝つことだけを学ぶのが部活動ではないですから。時には理不尽さや、強き者が勝ち、弱き者が負けるということを学ぶことも、部活動の側面ですね。

click

More about

岩城中野球部の活躍



離島ゆえの、合同チームゆえの不便さみたいなものがあるんじゃないかって言われることもあります。たしかに外から見たら、不便だろうし、不都合なこともあるんだろうけど、ここにいるとそれが当たり前じゃないですか。不便だから、人数が少ないから、やめましようということは思わないですね。

子どもたちの視野は確実に広がっていると思いますね。離島甲子園でいえば、自分たちと同じように、離島でがんばっている球児たちがいるということを経験しただろうし、全く違う地域の生

徒と触れ合うことで、自分と「違う」ところがあるという視点も持てるようになるし。野球を通して、学んでいるということになるんだと思います。

外に出ていくことで、島の中では味わえない刺激を受けているということはあると思います。「競争」という視点でみると、島の中だけだとしても、慣れ合いみたいなものがでてしまうので。保育所から中学校まで1クラスでずっと一緒に育つという環境ですから、外に出て、刺激を受けるということは良い経験になっているのではないかと思います。

課題を外と共有する

一子どもが少なくなっていくなかで、どうやってチームスポーツを続けていくことができるのでしょうか？

今回、弓削と岩城の合同チームが解散になってしまって、宮窪とチームを組むということになったときに感じたことなのですが、自分たちだけではどうしようもないことってたくさんあって、そこで自分に助け船を出してくれる人がいるということが大切だなと思いました。自分たちでどうにかしようとする、どうにもな

らなくなる。助けを求められるのなら、助けを求めた方が正解にたどり着くと思いましたね。

大なり小なり、チーム事情は似通ったものがありますね。それは、地域性がはっきりしている「島」というもの同士だからこそ、連帯しやすいというものもあると思います。

今回の合同チームについては、保護者の方が、「とにかく野球をできる環境を整えて欲しい」と言ってくれたので、

まとまったという経緯もあります。部活動、特に、野球に関しては、保護者の協力なしにはできませんから。

子どもたちが一緒に野球をすることで、宮窪のお母さんたちとも仲良くなったり、保護者同士のつながりもできていて、それも面白いと思います。



中学校から、島の反対側にあるグラウンドまでは、自転車で20分。坂道もなんのその。これも強さの秘密か？





嫌いでも「できる」ということ

心も身体も強い子であってほしいと思います。すぐ挫折して、逃避するようなことはしてほしくないですね。岩城中では、心も身体も強い子どもに育てて欲しいということから、全員運動部活動制にしていますので、必ず運動部に入ることになります。男子は、野球と卓球、女子は、テニスと卓球になります。

僕は、体育を好きになってほしいと思っているわけではないんです。そりゃ、好きになってくれたほうがいいですけど。でも、運動が苦手な子が、体育が好きかっていったら、嫌いだと思うんです。持久走なんて、誰がやっても嫌いですからね。でも、嫌いでも好きでも、「できる」、「我慢できる」ということが大切なのかなと思います。嫌いでもいいから、「できる」。そんなことも含めて、心も身体も強くなってほしいですね



主将の想い



KAMIJIMA 幸本 伊織
 正直、離島甲子園の抽選会まで出場すると
 いう実感が無かった。地元で行われるため
 練習も当日までできたので気持ち良かった。
 三年なので最後の大会となった。今大会は
 選手宣誓等、忙しい毎日だった。そのため、
 いづも緊張していたが、三日目が一番緊張し
 た。
 この日は勝ち上がれば計二試合すること
 なる。一試合目は西ノ表のチームと戦った。

苦しい展開もあったがどうにか勝った。た
 点グ少ししか取れず逆点もある試合だった。
 二試合目の志岐選抜は実力的にかなり上だ
 った。前の試合を見ても穴がないうい打っ
 ていた。私はこの試合投手として出場した
 けど、どの回ランナーを出されていった。し
 かし、選抜かかるとその欠点や相手にあ
 った。思いうそのため、苦しいな感じが
 た。地元でプレイしていろいろも大き
 かったと思う。正直、他の所でやっていたら

完敗か、たと思う。慣れたグラウンド、そ
 て一番は地元の人声援。それうがなければ
 勝っていいな、たと思う。
 この離島甲子園では、優勝することができ
 たし、課題であった野球を楽しかることができ
 た。さらに、村田兆治さんからは、たくさん
 アドバイスをいただいた。野球を続けたい
 う長持ちがより一層増えました。
 このようないい思い出も、この大会が
 あってこそ。本当に大会の関係者の方々に

上島町立岩成中学校
 上島町立星城中学校

感謝してます。地元の方々へも感謝しな
 ればならないなと思います。ただ、これか
 らも離島球児の成長の場として、何年も続
 けたいなと思います。
 自分に自信をもつことができたし、夢や希
 望を与えて下さった。そして、同じ離島に
 いる球児を見て、負けられないなという気持
 ちも湧くことができた。将来のためのものを
 たくさん得ることができた。本当にありが
 とうございました。

外にでようぜー！

大変、お待たせしました！スモールストーリー第三号をお届けします。今回は、岩城中学校にお邪魔して、お話を伺いました。学校というものは、毎日通っていた時は早く外に出たいと思っていたのですが、行けなくなると、何ともわくわくする場所です。

田窪先生のお話を聞きながら、二つのことを考えました。一つは、「できない」という状況が、別の「できる」状況を生むということの面白さです。そして、この新しい繋がりは、「野球」というテーマだからこそ、生まれたものでもあると思います。

これが、まだ現状で「なんとかなる」状況だと、外に助けを求めたり、新しいことをするというのは、なかなか腰が上がりません。でも、野球のように九人いないと成立しないものだと、どうしようもない。だからこそ、学校も、保護者も、「子どもたちに野球をしてほしい」という目的のもとに団結できる。これは、強いパワーだと思えます。危機というのは、非常に強い力です。

もう一つは、困難が、島を開き、拓いていくという希望です。部員数が少なくなることによって、岩城中は、島を超えて弓削中と、さらには町を超えて宮窪中と組むという経験をしています。

小さい頃から、ずっと一緒に育ち、地域の人たちや、先生がしっかりと見守ってくれる環境で、育つことができます。島の子どもたちは幸せです。けれども、それだけでは見えないことがあります。「外の世界」に触れ、自分たちと「違う」ものに出会うこと。そして、自分と違うものに出会うことを通じて、「自分」を知ること。岩城中野球部は、自分たちだけでは野球ができない代わりに、そういう視点を得ています。

そして、子どもたちの繋がりが、今まで全く繋がりのなかった地域同士の繋がりを生む。これも、とても面白いことです。

瀬戸内には、たくさん島があります。まちづくりということを考えてときに、島内、町内だけでなく、都市と地方という区分けでもなく、「近くの島」と繋がっていくことの可能性を岩城中野球部に教えてもらいました。



click
本誌の
コンセプト

『スモールストーリー』が読める場所

【紙で読む】弓削総合支所、弓削港、町民プラザ、せとうち交流館、弓削商船図書館・寮、弓削高校図書室、弓削中学校、しまでカフェ、やよみ亭、立石港、岩城港、岩城中学校、よし正、尾道港

【ネットで読む】上島町島おこし協力隊のブログ <http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/>

About ME



文と写真と編集
ふじまき みつか (まっきー)

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学教養学部国際関係学科専攻。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→上島町生名

都内マーケティング会社に勤務のち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町(人口約7500人)の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

最近読んだ本: 内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』、中沢新一『日本の大転換』、上野千鶴子、古市憲寿『上野先生、勝手に死なれちめ困ります 僕らの介護不安に答えてください』、宮崎駿『本へのとびら』、ミハエル・エンゲ『モモ』

click
いいね!してください
facebook

協力隊の日々をチェック
blog



かみじまのことば

とりのこ用紙



【意味】 模造紙

【使い方】 文化祭シーズンによく使う

【用例】

先生がとりのこ用紙取ってくるけん、
それに書いとって。
(先生が模造紙取ってくるから、それに書いておいて。)



How do you think?
ご感想お聞かせください。

メール: fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp